

# 寄せ場と民族

その一 アイヌ

中村 豊

セニターで毎日発行されている「寄せ場

ゆく仲間の新報」へ金ヶ崎新聞社発行の

八一年一〇日一ニ日号に、「北方領土は日

本固有の領土である」と民族の独立、国家

の主権を主張する」などと書かれていた。

いま争われている北方領土とは、クナシ

リ、エトロフなど四つの島のことらしいが、

これらの島の先住民族のアイヌ、オロツコ、

ギリアーク山などのことは一言も書かれて

いない。

X

X

昭和四七年（一九七二年）に、東京の寄

せ場山谷で、橋根直彦さんという前住者か、

飲み友達とささいなことでケチとなり、

相手だ「何、このアイヌ」と言ったのに

カッとなって、近くにあった果物ナイフで

刺し、殺してしまうというところがありまし

た。

裁判の途中まで、橋根さんは「何、この

アイヌ」といわれたことは黙っていた。い

ままのアイヌ差別の中で、アイヌである  
ことを認めたくなかつた彼は、そんなことは  
は言ってもしかたがないと思つたのかもし  
れない。しかし裁判の中で、山谷の労作者  
の中に、アイヌ差別反対を闘う仲間があり、  
彼らの協力のなかで、始めて彼は、アイヌ差  
別を闘うことを決意し、ケニカの中にあつ  
た差別をバクコロした。彼は裁判中に二冊  
の本を出した。新泉社発行の蝦夷地滅びて  
モ、アイヌモミリは滅びず。これにアイヌ、  
自然に起つて  
彼は、少エリ頃から「アイヌ」というこ  
とを差別をつけつけ、それに対する有効

な反撃の手段を見つけたせよ、日雇  
労作者として全国を流して来た。  
そしてケニカのもととつた酒についで  
「私は酔つて居る時が一番良いのです。な  
ぜかと言うと、アイヌもミヤモも同じだか  
らです。なにより嬉しいのは、私が酒を出  
すと皆んな飲んで下がる。けつしてアイヌ  
をバカにしません。だから私は会う人、会  
う人に酒をオゴります。そして、私はミヤ  
モから好かれるようにつとめて来たのです。  
そして、アイヌから逃げて来ました。だか  
ら、アイヌの顔を見るのも嫌だつた。アイ  
ヌから逃げるために酒をアピルほど飲んだ。

、、と書いています。(口我以アイ  
ヌ、自然に起つて)

釜ヶ崎でもよく見かける光景です。いろ

んな様なことから逃げるために酒を飲む、

そしてアル中や肝硬変、……。

橋根さんも書いているけど、もともと北

海道はアイヌの土地であつて、昔から日本

のものではなかつた。江戸時代に、松前藩

が今の函館からわたり、わづかながら領土を

主張していたが、それより北の北海道の大

半は蝦夷地として呼ばれ、アイヌの地であ

ると認めていた。もって昔は、東北地方も

蝦夷地だつたやうだ。詳しく歴史は学者に  
人にまかせるとして、最近の歴史を簡単に  
みてみよう。

江戸時代の商業や交通の発達の中で、魚  
や手皮を求めて多くの商人が北海道に集ま

つてきた。米のといはかつた松前藩は、こ

うした商人に、アイヌとの商売の上前を(知)

ぬることによつて著財政をさぐえ、商人が

アイヌともめると用心棒役をはたしていた。

魚や手皮を米や酒との交換から始まった

取り引きも、何も知らないアイヌをだまし

てボロ儲けしていたが、そのうち、アイヌ

の自然を大切にする村に対し、より多くの

利益をあげようとする商人は、網や鉄砲を  
使ひ乱獲しはじめ、大多くのアイヌの抵抗  
に会つたが、その都度、松前藩が出て、武  
力弾圧を加えた。

一六六九年(寛文九年)にはシヤクシヤ  
クニが北海道のアイヌを統合して、和人を  
遣ひだそうとして決起し、あと一歩という  
ところまでおいつめながら、話し合ひをし  
ようと二つ松前藩の呼びかけにだまされ、  
話し合ひの場でだまら打らに会つて殺され  
た。

一七八九年(寛政元年)には、今北方領  
土(返還?)の對象となつてゐるクナシリ

島でも反乱がおきた。この時も松前藩は、  
シヤクシヤクニの時と同じく話し合ひを呼  
びかけ、多くのアイヌがだまし討ちに会ひ  
殺されてゐる。

江戸時代末期には、こらした酷使と弾圧  
によつて、近いうちにアイヌは滅びるので  
はないかとまでいわれた。

明治政府は、当時南下してきたロシアに  
対抗するため、勝手に北海道を自分の領土  
として宣言し、大羊を天皇の土地(今の国  
有地)としてしまった。そして、先住民族  
アイヌに対し、口田工人保護法なる差別  
法律を作り、農業者とするものに限る、僅か

な土地を与える(ウシ)ことにした。

業に日雇いとして働かざるをえないうつ